

## 「伊勢湾台風」被災後の福祉実践に見る「協働的取り組み」

—ヤジエセツルメント保育所を事例として—

○ 中部学院大学 氏名 平野 華織 (会員番号 4323)

キーワード3つ：伊勢湾台風・臨時託児所・協働

### 1. 研究目的

本研究は、1959年伊勢湾台風の被災地、名古屋市南区弥次衛町で“モグリ”の臨時託児所として出発したヤジエセツルメント保育所が、地域住民と外部支援者らの手によって運営され、その後市立保育園建設へとつなげた実践に焦点をあてる。この福祉実践においては、大学教員・大学セツルメント・保母、東京・名古屋保育研究会関係者らと地域住民との「協働性」を見出すことができ、今日求められている非常時の「協働的取り組み」の意義をとらえなおすための手がかりとなると考える。本報告では、ヤジエセツルメント保育所の「協働的取り組み」に関する実践的意義の歴史的検証を行いたい。

### 2. 研究の視点および方法

「阪神・淡路大震災」を契機として、地方自治分野で、市民が行政とともに地域の問題解決に向けて取り組む「協働 (Coproduction)」の意義が再確認されて以降、何らかの目標を共有しながら、複数の主体が互いの不足を補いあい、協力して課題解決に向けた取り組みをする「協働性」の実践的検討は、福祉・保育分野でも吃緊の課題となっている。「ポスト3・11」にある現在、災害が私たちに何をもたらし、そこから何を学ぶかが改めて問われはじめつつある。「伊勢湾台風」については、被災後に各方面で多くの「協働的取り組み」がなされ、半世紀以上にわたって、それを風化させない努力も積み重ねられてきた。しかし、社会福祉学では真田是や高島進、浦辺史ら、保育学では土方康夫や宍戸健夫らがいくつかの成果を公にしているだけであり、「伊勢湾台風」に関する社会福祉学研究は大幅に遅れていると言ってよい。そうした先行研究の状況を踏まえつつ、本報告では伊勢湾台風被災後のヤジエセツルメント保育所で行われた「協働的取り組み」に関する文献・資料を収集し、次のような2つの視点から分析を行う。

第1に、「問題史」的アプローチを試みるという点である。本研究では、「非常時」における福祉の実践的な対応を過去の優れた取り組みから学び、その歴史的検証を通して、今日的意義の抽出を企図する。第2に、「実践史」としての視点である。「伊勢湾台風」被災に関する従来の研究は、自然科学系の研究者による調査や実験などマクロ的な立場でのものが大半を占め、被災後の各方面で行われた福祉・保育実践を取りあげるミクロ的な立場のものは非常に少ない。本研究では、真田・高島・浦辺・土方・宍戸らによってなされた先行研究を踏まえ、今日的な視点から新たに光を当てることで、当時の取り組みが内包し

ていた実践的価値を検証してみたい。

### 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に従って研究を行う。研究に用いる資料はすべて原典にあたり、当日配布予定の資料に参考・引用文献を明示する。

### 4. 研究結果

「愛知の保育の原点」であり「その後の保育所づくりの活動も、保母の労働組合の活動も、保育研究活動もすべてヤジエが原点であった」（土方 1974）と評されるヤジエセツルメント保育所の実践は、『レンガの子ども』として何度も出版されている。保育分野では、子どもたちに創造的な保育方法を開拓したとして、日本の保育史上に記録されるべきものであり（浦辺 1963）、名古屋保育研究会が誕生し発展・継承していく原動力となったとも言われている（宍戸 2009）。社会福祉分野では、伊勢湾台風後の名古屋市南部等地域の活動を「役所のための地域の組織化ではなく、本来の意味である、住民のための地域の組織化が試みられつつある」（真田 1960）として注目し、当時の外部支援者による一連の救護活動は「名古屋の民主主義的力量を強める契機となった」（高島 1997）と評価している。このような実践が可能になった背景には、ヤジエセツルメント保育所が被災地の“モグリ”の臨時託児所であるが故に、地域住民と外部支援者の手で運営せざるをえず、両者が〈葛藤〉・〈協働〉を繰り返す中で、実践的意義を見出していった同保育所の「経験」が大きいと考える。また、学生セツルメントによる地域調査で弥次衛町の固有性が把握されていたこと、必要資源を外部調達する手法を身につけていたこと、東京・名古屋保育問題研究会が組織としてバックアップしていたことなどが、「協働的取り組み」を持続させた原動力とも考えられる。

### 5. 考察

教育学者の小川太郎（1960）は、被災による教育の中断と被害を単なる“復旧”に終わらせるのではなく、被災地域が何か新しいものを復興につけ加えることによって、そのハンディキャップが克服され、さらには他地域を追い越しさえすることがあるとした。小川の指摘は生活保障の要である福祉にも重なるものであり、弥次衛町の父母や住民による組織的な思考と行動は、市立保育所建設を実現させ、失ったものに代わる新しい価値を創造した「協働的取り組み」であったといえる。2011年東日本大震災が起こり、未だ復興していない地域もある。地域住民と外部支援者の〈協働〉のあり方を見直すためにも、ヤジエセツルメント保育所実践は社会福祉実践として今日的意義をもつと考える。

引用文献：土方康夫「たたかひの記録としての『レンガの子ども』」、『レンガの子ども』さ・さ・ら書房 1974年 / 浦辺史「保育運動からみた『レンガの子ども』」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども』1963年 / 宍戸健夫「序にかえて『レンガの子ども』の再版を祝す」河本ふじ江、原田嘉美子『レンガの子ども』ひとなる書房 2009年 / 真田は『伊勢湾台風と地域組織化の問題』社会事業、43（1）1960年 / 高島進『伊勢湾台風と社会福祉』社会事業史研究、第25号、1997年 / 小川太郎編『災害と教育』新評論版 1960年